ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「ばかものぉっ！」

　密猟者との戦いが終わった途端、田島辰巳の怒鳴り声が轟いた。その声の迫力たるや、ここに戻ってきた鳥ポケモンが再び驚き、どこかへと飛んでいってしまう程である。

「あれほどっ！　ああいう奴らを見かけたらっ！　すぐ逃げるよう言っただろうがっ！」

　腰に手をあて、声をさらに荒げる。声がかれないのが不思議なくらいだが、縮こまっている雅也と太一に、そんなことを考える余裕は無い。

「大体だっ！　君達二人はっ！　あの状況でどうやって勝つつもりだったんだっ？」

「え……えっと、ですね……」

　そうモゴモゴと喋る雅也だが、既に涙声で、目も赤い。流石の太一も、今回ばかりはいつもの威勢を失い、ずっと下を向いて項垂れている。

「特に雅也！　太一君のポケモンは遠距離系の攻撃しか出来ないから、まだ分かる！　だが、お前のポケモンに限って言えば！　離れた相手には攻撃を当てられんだろうが！　なぜ近づかなかったっ？」

「あの……怖くて……銃弾が……遠くなら躱せるし……」

「ならすぐに逃げなさい！」

「は……はい」

　ここでようやく、太一が顔を上げ、口を開く。ちょっと目が潤んでいるものの、それでもしっかりと田島辰巳の目を見ていた。

「え……っと、あんた、じゃなくて田島……さん。今回雅也が戦いに巻き込まれたのは、ほとんど俺が無理矢理誘ったからなんだよ……ちげぇ、誘ったからなんです。あんまし、怒んないでやってくれねぇか……じゃねぇな、怒んないでくれ……ください」

　所々怪しいものの、小学一年生にしては、見知らぬ他人相手への言葉遣いは良く出来ている。とは言え、話した内容は、雅也にはとても容認出来るものでは無かった。

「いや、太一のせいじゃないよ。元々ここには、ああいう相手と戦うつもりで来たんだし……太一がいなかったら、一人で戦ってた」

「でもよぅ……俺がもっと『破壊光線』を上手く使っていりゃぁ、お前らのポケモンはあいつらに接近できたわけで……なんか、俺が足引張ちまったっつーか……」

「ううん。探せば、近づける隙はいくらでもあったわけだし……」

「でもよ、最後らへんで、ピカチュウは相手に近づいてなかったっけか？」

「いや……あれは、悪い癖が出ちゃっただけだし……」

「自惚れるなぁっ！」

　際限なく続きそうな二人の会話に、田島辰巳は無理矢理割り込み、中断させる。二人の体が、ビクンっとなって、再び縮こまる。

「どっちが足を引っ張ったとか、そういう問題では無い！　君達二人は、まだ子供だろう！　殺意を持つ相手の戦い方など、まだ知らんはずだ！　少なくとも、雅也にはまだ教えていない！　上手く戦えなくて当然なのだ！」

　流石に可哀想になってきたのか、田島辰巳の声も、少し落ち着いてきた。だが、それでも強い口調で、二人を叱りつける。

「だから戦おうなどせずに、早く逃げなさい！　死んだらどうするつもりだったんだっ？　いいか、逃げることは、決して恥じることでは無い！」

「す……すみませんでした」

「わりぃ……じゃない。ごめんなさい」

　こうして二人が謝ったところで、ようやく田島辰巳の説教は終わった。

「あの……田島師匠」

　撃たれたキリンリキと密猟者達を百十番通報し――雅也と太一は、ここで今度は警察に怒られた――戦いで汚れた川を三人とそのポケモン達全員でなるべくキレイにした後のことだ。その頃にはすっかり空も赤くなっていて、雅也は帰る時間になっていた。太一は本当ならキャンプの予定だったが、こんなことがあった日なので、今日は家でゆっくりするそうだ。太一を家まで送り届けている途中、雅也はふと気になったことを、前を歩く田島辰巳に聞いた。

「師匠はなんで、僕たちがあそこにいるって分かったんですか？」

　行き先を誰にも告げずに出てきたので、田島辰巳がこのことを知っていたとは思えなかったのだが、一体どうやって知ったのか、雅也はずっと不思議だった。

「ああ、そういや、何で俺の苗字を知ってんだ……知っているんですか？」

　それも、雅也は気になっていたことである。雅也は田島辰巳の前で『星川』と呼んだことは一度もない。もっと言えば、師匠の足取りに迷いが無いことも、おかしいと思っていた。

　まるで田島辰巳は、星川太一の家を知っているかのようである。

　そしてこの答えは、すぐに彼の口から告げられえた。

「なんでって……星川君に関しては、知っていて当たり前だろう。星川君のおじいさん、田島竜平は、俺の師匠だからな」

「……」

　一瞬フリーズして足を止めた雅也だったが、すぐに復活して、バッと太一の肩を掴む。

「そ……そうなの？」

　だが、太一もそれは初耳だったらしい。目をぱちくりとさせていた。

「い……いや、知らねぇ……確かにじいちゃんは、おっかねぇ位強いし、家の裏にバトル場なんかもあるけどよ……」

　雅也は、唖然としていた。一体どの位強いのか、彼にはとても想像がつかない。

　時々、雅也はふと考える事がある。師匠とジャックが戦ったら、一体どちらが勝つのだろうか、と。頭の中で何度シュミレーションしても、結果は分からなかった。雅也の中で、二人は同じくらい強いのだ。例え、二人から感じるものが違くても、である。雅也の中で、二人はポケモントレーナーの頂点だと思っていたのだが……確かに、田島辰巳にも師匠はいるだろうと、納得した。そして、ジャックにも同じように、師匠がいるに違いないということも、雅也は悟る。

　世界は広いと思った瞬間だった。

「ムッ……？　もしかして雅也には、俺の師匠の話をしていなかったかな？　今度聞かせてやろう」

　微笑を浮かべてそう言った田島辰巳は、今度は雅也達の後ろを指差した。

「……おっ、あいつは」

「……あっ」

　振り向いた二人の目に、トコトコと歩く、一匹のポケモンが飛び込んでくる。逆光のせいで、黒くシルエットでしか確認出来ないが、そのポケモンが一体誰なのか、二人には一発で分かった。

「そして、俺がお前達の居場所を知ったのは、そのポケモンのお陰だよ」

「ゼ……ゼニガメ？」

　そう呟いた雅也の腕に、ゼニガメは飛び込む。ずっしりとした重さを両腕に感じながらも、雅也はキョトンとしていた。

「あ……あの、どういうことっすか？」

　なので、代わりに太一が田島辰巳に聞く。

「俺くらいになるとな、自分の近くで戦いが起きると、それが何となく分かるんだ。まぁ、勿論、お前達が戦っているなんて夢にも思わなかったが。そんなに強い『感じ』じゃなかったが、不穏な空気だったから、一応そっちへ向かったんだが……川まできた時、途中で戦いが終わったのか、その『感じ』が消えてしまってな。森の辺りなのは分かっていたから、念のため現場には向かおうと思ったんだが、具体的に、戦っていたと思われる場所までは分からん。引き返そうかと思った俺に体当たりをぶちかましてきたのが、そのゼニガメだよ」

　そう言った田島辰巳は、左脇腹のあたりをさする。平気そうな顔をしているものの、どうやらあそこに、ゼニガメは突撃したらしい。さっきの田島辰巳の戦いを見ていた太一は、ブルっと震えた。とても自分には真似できないと、そう思ったのだ。

　だが、あくまで田島辰巳は微笑で、話を続ける。

「なんだこいつは……と、最初はそう思ったのだがな。どうやら、切羽詰まった様子で俺の裾を引っ張ってくるから、これは何かあるなと……で、ついて行ってみたら、お前等が戦っていたという訳だ」

「そ……そういえば、途中からゼニガメがいないなぁ……なんて思ってたけど」

「まぁ、逃げても不思議じゃねぇ状況だったから、気にしてなかったけどな」

　雅也は太一のその言葉を聞いて、ゼニガメをゆっくり地面へと下ろす。腕の中ではキャッキャしていたゼニガメだったが、下ろされると、不安そうに雅也を見上げていた。そんなゼニガメを見た後、雅也は太一を見て、互いに頷く。そして、二人は深呼吸してから、勢いよく頭を下げた。

　ありがとうございました、という言葉と共に。

「……ところで雅也」

　二人の様子をジッと見ていた田島辰巳が、突然口を開く。そして、この場の誰もが想像していなかったことを言う。

「そのゼニガメ、お前の手持ちに加えたらどうだ？」

「……え？」

　慌てて、雅也は田島辰巳を見る。

「俺に攻撃を仕掛けてくる奴は、中々いないからな。攻撃を受けてみたが、結構センスもいい。それともなんだ、嫌な理由があるのか？」

　勿論無いと、雅也は断言出来る。だが、それ故に、雅也は躊躇っていた。このゼニガメを自分の手持ちに加える資格が、果たして自分にはあるのか、と。正しい判断ができれば、今回は命を危険に晒らさずにすんだのだ。ジャックの時とは、わけが違う。

「いいか、雅也。確かに俺はさっき、『逃げることは、決して恥じることでは無い』と言ったが……」

　雅也のその心を見透かしたかのようなタイミングで、田島辰巳は雅也の頭の上に手を乗せる。

「逃げっぱなしじゃダメだ。どこがどうダメだったのか反省して、変えなさい。そして、手を差し伸べてくれる相手がいるなら、今はちゃんと、その手を取れ。人の言葉は話せないが、そのゼニガメは、雅也の助けになりたいと思っているんじゃないか？　だから、あそこから逃げることなく、助けを呼びにいったんだろう？　お前のピカチュウやリオル、フシギダネだって、皆お前の力になりたいと思っているんだぞ。勿論、俺や拓馬達、そして星川君もな」

　ふと、雅也は太一と、そしてゼニガメと目があった。

「は……はい。分かりました」

「但し、世話はちゃんと自分でするように！」

　こうして雅也の手持ちにゼニガメが加わり、今日は終わった。